仲山佳秀　学位（博士）請求論文審査報告書
論文題目：発達的観点から見た運動と思考との連関
——運動の内面化説の検討——

本論文は、思考と身体運動の連関を発達的観点から明らかにすることを目的としたものであり、具体的には、思考は身体運動が内面化することによって成立するという思考に関する「運動の内面化説」を独自の観点から定式化し、擁護しようと試みたものである。

思考活動は、ロダンの彫刻「考える人」の静止した姿勢が象徴的に示すように、身体運動とは結びつかない活動とみなされることも多い。この見方は、西洋哲学の歴史のなかでは、心と体、精神と物質的身体を切り離して考える二元論的見方を支えるひとつの根拠とみなされることもある。

しかし他方では、考える活動にとって運動が重要な役割を演じるものであることもよく知られている。たとえば、漢字の書き方を思い出そうとする場合、思わず指を空中で動かして書く振りをすることがある。「空書」と呼ばれるこの経験は日本ではなじみの現象である。また、心理学や哲学のなかでは、思考や認識に対して身体活動が構成的役割を果たしている、という考え方はこれまでもさまざまな仕方で論じられてきており、特に現代では、認知科学や「心の哲学」のなかで、「身体化された認知」という言葉によって注目を集めており、さまざまな仕方で二元論的な見方を越える試みがなされている。

仲山氏は、このような現代の流れを背景として、本論文においてあらためて、これまでの心理学的な議論、とりわけ、運動の内面化説として特徴づけうる議論を詳細に検討しなおし、思考と運動との関係を新たな仕方で定式化することを試みている。この試みは大きく分けると二つの部分からなる。第一の部分は、自ら行った脳性麻痺児を対象とする構成行為をめぐる具体的な事例研究の解釈を通して、空間的思考を形成する内面化された運動として「抽象的運動」という独自の概念を提起することである。第二の部分は、提起された抽象的運動という概念を、これまで提出されてきた代表的な内面化説を批判的に検討することによって、より明確なものにする作業である。こうした批判的検討を通して、これまで思考にしても運動にしても、それぞれのあり方を詳細に区別することなく、ごく大雑把に語られてきた思考に関する運動の内面化説を精緻化して、どのような種類の思考が、どのような種類の身体運動と、どのような仕方で連関しているのか、を明らかにしようとしている。具体的にいえば、空間的思考が高次の内面化された運動である抽象的運動によって形成され、そのさい、抽象的運動は、思考操作において、媒体ないし手段としての役割を果たす、というのが仲山氏の主張であり、本論文の結論である。以下、各章ごとの内容を取り上げながら、この

結論へいたる本論文の議論の筋道を簡潔に紹介する。

第一章では、痙直型脳性麻痺児における構成障害が具体的事例として取り上げられる。この種の脳性麻痺を負っている子供のなかには、知覚や知能、そして構成行為を行う運動機能には問題はないが、絵を描いたり、字を書いたりといった対象を構成する行為に障害を示す場合があることが知られている。また、構成障害のある脳性麻痺児のほとんどは、構成すべき図形の形態を正しく弁別できることが知られている。このため連合説と呼ばれる解釈によると、この障害が引き起こされるのは、図形の認識に問題があるためではなく、正しく認識した内容を行為のパターンへ変換する過程に問題があるためであるとみなされてきた。それに対して仲山氏は、実験を工夫することによって、この種の子どもたちは、形態を弁別できるが、形態の構造を詳しく分節化してとらえることができないことを示した。つまり、仲山氏は、脳性麻痺児の構成障害は、単に行為の側の障害ではなく、空間認識にも関係する障害でもあることを示したのである。この解釈を基に仲山氏は、認識と行為は密接不可分であるという構成障害に関しての統合説と呼ばれる見方を支持することになる。と同時に、統合説の議論を利用した上で、新たなモデルを提起する。そのモデルの中核をなすのは、認識と行為の両方に関係する高次の「抽象的空間表象」という概念である。構成行為に必要な図形の構造を分節化してとらえる認識が実現する場合には、図形に関する抽象的な空間表象が形成されているはずであり、この表象に基づいて、図形の構造の認識が行われると同時に、それに基づいて、図形の構成行為が実現することになる。こうした観点からみると、図形構造の認識の障害と、図形を構成する構成行為の障害は、同じ事象の二つの側面ということになる。こうして、仲山氏は、構成行為の障害の分析において、「抽象的空間表象」という概念を中心とするモデルを用いることによって構成行為における認識と行為の連関構造を整合的に描く可能性を示し、統合説への理論的基礎を与えることになったと考えられる。

第二章では、第一章で得られたモデルを基に、さらにその内容を明確化するために「抽象的空間表象」を形成する働きとして、「抽象的運動」という概念を導入する。この運動は、通常の知覚経験などで、対象認知のために働く身体運動のような低次で現実的な運動とは違い、イメージ空間のなかで、より自由で可能的な仕方で実現することができる運動を意味している。そして、この概念をさらに明確化するために、メルロ＝ポンティがシュナイダー症例として知られる精神病理現象を分析するさいに導入した潜在的で可能的な運動という概念を取り上げ、抽象的運動という概念がメルロ＝ポンティの用いる潜在的運動という概念と重なることを示し、抽象的運動は、現実的運動の背景の形成や、思考におけるカテゴリー性や抽象性を形成する役割を果たすことを示す。

次に、以上で得られた抽象的運動という概念に基づく運動の内面化説の見方をさらに明確化するために、これまで提出されてきた代表的な内面化説の批判的検討を行う。

第三章では，ピアジェの認識発達理論が取り上げられる。ピアジェの理論では、認識能力の発達は、運動が根本となり、知覚と運動の連関からなる感覚運動期から始まって、模倣運動が内面化されたイメージが形成される前操作的表象期、続いて、具体的操作期、最後に、形式的操作期へと段階を踏むとされる。仲山氏によると、イメージ形成の表象期と、後半の操作期とは、おもに体系性という点で区別される。構成行為に即していえば、形態の知覚またはイメージの形成が表象期に対応し、形態を分節化しそれを構成できることが操作期に対応することになる。しかしながらピアジェは操作期にいたる発達の起源をあくまでも感覚運動期に求めているために、操作の体系性の成立をうまく説明できずに、たとえば、操作の形成を社会的協働といった要因を突然導入することによって説明せざるをえなくなった。つまりピアジェは、運動から思考の働きである体系的操作までを一貫した形で連関させて説明することに失敗しているということになる。換言すると、ピアジェの発達理論では、低次の運動と区別される高次の内面化された運動である抽象的運動という概念を導入することができなかったために、発達理論に不整合が生じたと解釈できることになる。

第四章「想像力の理論」では、ジョンソンによる身体化された想像力の理論と月本の身体運動意味論が取り上げられる。仲山氏によると、月本の理論はジョンソン理論の神経科学バージョンなので、ここではもっぱらジョンソンの理論についてのみ触れる。ジョンソンの理論では、知覚を中心とした感覚運動的活動によって形成されるイメージ図式が、想像力によって抽象的な領域にメタファー的に投射されて、概念的・言語的な思考が成立するとみなされる。たとえば、ある場所から出たり入ったりすることや、あるいは、ある容器の中に物を入れたり出したりする経験から、内ー外や包含というイメージ図式が獲得され、これが集合とその元やその部分集合との関係といった抽象的な関係へと投射され、ひいては、数の概念の理解を支えることになるとみなされる。これらは、感覚運動的経験における身体運動と思考の形式とを想像力に基づくメタファー的投射によって結びつけるという点で、やはり運動の内面化説の一種と考えられ、このメタファー的投射の働きは、抽象的運動に対応させることができる。しかしジョンソンの場合も、発達段階の区別が軽視されることとあいまって、運動と連関した想像力の働きのレベルが低次の運動によるイメージの形成のレベルと明確に区別されておらず、そのために、思考の種類わけや、思考の操作と形式の区別と連関が不明確なままにとどまることになる。

以上のような考察を通して、仲山氏は、これまでの思考に関する運動の内面化

説に示された困難、すなわち、運動と思考を直接結びつけようとして生じる困難や、思考の種類わけをせずに思考の形式と操作に関して、両者の区別と連関を不明確にしてしまう困難を、抽象的運動という独自の概念を導入することによって克服することができることを示した。これが、本論文の最も重要な成果であり、運動の内面化説に大きな寄与をなすものと考えられる。

他方で、本論文の中核をなすはずの思考という言葉が、構成行為の場合のように、空間的思考を意味する場合から、言語的推論を含むより広い意味でも用いられる場合まで、必ずしも明確に区別されずに用いられることがしばしばみられる。そのために、思考の操作と形式の区別と連関という最も重要な論点に関して明確さを欠く場合がある点は否めない。くわえて、思考の形式の起源に関して、「おそらく身体または運動の人類における共通性と言語にある」（１０６ページ）と述べるにとどまっており、この点に議論の不十分さがみられる。

ただし、これらの点に関しては、仲山氏は十分理解しているようであり、本論文の最後に自ら今後の課題として指摘しており、今後の研究に期待したい。

以上のように、本論文は、思考に関する運動の内面化説とみなされる多様な見方を広範かつ詳細に検討するとともに、具体的な事例研究に基づく成果をも踏まえたものとなっており、哲学と心理学の交流から生まれた重要な業績と考えられる。こうした点で、十分に博士論文にふさわしいものと判断できる。

なお、本論文の審査にさいしては、文学研究科の内規に従って、２０１９年１月２２日に口頭試問・公聴会を行い、仲山氏による論文概要の発表と、審査委員を含めた参加者からの質問や意見表明がなされ、仲山氏との討議が行われ、十分その力量が示された。審査委員は、その評価も含めて学位授与を可とすると判断するものである。

平成３１年１月２２日

主査　立正大学大学院文学研究科哲学専攻
教授　村田純一
副査　立正大学大学院文学研究科哲学専攻
教授　野矢茂樹
副査　立教大学大学院文学研究科教育学専攻
教授　河野哲也